

序章「人」が鍵

町村合併効果

文化ホール3館を有する小美玉市は、2009年にみの～れが地域創造大賞を受賞し、アピオス・コスモスにも住民参画による運営が展開されているように、「住民参画による文化のまちづくり」を実践するまちとして全国的に高い評価を受けています。

みの～れの地域創造大賞受賞のポイントが、審査委員会によって次のように記述されています。

徹底した市民参画によるホール運営を推進。約200名の住民実行委員会が毎年、各種事業計画に携わり、住民劇団・住民楽団を含むボランティア組織の「みの～れ支援隊」約160名が事業を支えるなど、ホール事業を通じたまちづくりの新たな人材育成のあり方を提示した。

町村合併によってみの～れからアピオス・コスモスに広がった、住民参画によるホール運営。ホールの運営や事業推進に数多くの住民が参加・参画し、元気を生み出しています。

特に、他の行政分野で見られない10代～30代の若者の参加・参画を得ており、3世代が入り混じって創造的な活動を行なっています。ときには企画を生み出し、表現者として舞台に立ち、バックヤードを支え、フロントスタッフとして客を迎え、記者として取材に飛び回り、さらにはホールを飛び出して地域交流を図るなど、文化をまちの隅々まで届けています。

館職員はその活動を支え、時には先陣を切って開拓し、新たな住民の参加・参画を促す役目を担っています。

活性化に燃えるアピオス

アピオスは、30年近くに渡って演歌や歌謡曲の歌手を中心に招聘して鑑賞事業を行い、長年「大衆劇場」として役割を果たしてきました。

平成20年度から、活性化のための手法と方針を考える「小川文化センターを活性化する会」(後に小川文化センター活性化委員会へとつながる)を立ち上げ、愛称募集 オリジナル企画の創造 施設の修復と改善、という3つの活性化の手法と、『共に支え合う自由空間』というミッションを策定しました。現在は小川文化センター活性化委員会が毎月会議を開き、アピオスの自主事業や運営ルールの改善、全国の事例を参考とした学習や住民プロデューサーとして必要なスキルを身に付ける研修などを行なっています。

また、国民文化祭演劇祭を支えた住民ボランティアスタッフの中核メンバーと館が連携し、文化ボランティアスタッフ「アピオスばるず」を立ち上げ、住民が支える文化活動の拠点としての体制を整えています。

オリジナル企画にも積極的に取り組んでいます。プロの指導・演出、プロバンドの演奏のもとスターになりきって歌う「スター なりきり歌謡ショー」や、大ホール舞台上に仮設客席を設置してこだわりの企画を手作りで行う「アピオス小劇場」シリーズ、おやじの復権を目指して企画した「おやじバンドコンテスト」を開催し、地域の元気づくりに取り組んでいます。

全国から注目を集めるみの～れ

みの～れは、誕生日の平成8年から住民参画によるホール運営に取り組んで15年。みの～れが今後どのように成長していくか、アピオス・コスモスにとって一つのモデルになります。「つどう・つなぐ・つくる」をミッションとして掲げ、住民劇団・住民楽団を含む文化ボランティア「みの～れ支援隊（4部門7組織）」と、事業を企画実行する「各種実行委員会プロジェクトチーム（8組織）」があります（参照：みの～れ住民参画イメージ図）。これらの代表や一般公募の住民が参画している「四季文化館企画実行委員会」は、ホールの自主事業の推進や運営ルールの改善について毎月話し合いを持っています。

住民が参加・参画する受け皿は、ミュージカル、器楽、企画プロデュース、広報デザイン、フロントスタッフ、次世代リーダー育成などで、その徹底した住民参画への取り組みは全国的にも先進事例として取り上げられる存在です。今後は経験やノウハウだけでなく、想いもバトンタッチしながら世代交代と新たな輪の拡大をいかに図っていくか、小美玉3館の将来を左右するモデルケースとして注目を集めています。

周辺環境も一帯として捉えるコスモス

コスモスは、図書館・史料館・公民館・文化ホールを併設する生涯学習センターとして、各施設と連携して市内全域に生涯学習を発信していく拠点に位置づけられています。

平成20年度に「玉里文化ホールを考える会」（後にコスモスプロジェクトへとつながる）を立ち上げ、生涯学習の拠点としての特長づくり 住民参画による事業展開 アットホームな身近さ、という提言を行い、文化ホールのみな

らず、コスモス全体・しみじみの家・民家園まで含む敷地全域をコスモスプロジェクトのフィールドとして捉え、周辺環境も含めて元気づくりに取り組んでいます。

コスモスプロジェクトの具体的な活動としては、フィールド内あちらこちらの場所に企画する「C・C・C（こすもす・きゃんぱす・こんさあーと）」、コスモスを拠点に活動するサークルを積極的につなぐ「サークル交流会」、若い母親を対象にした学び体験の機会を企画する「コスモスカフェ“win-win”」、さらに現在はコスモスのロゴデザインを筑波大学と連携して取り組むプロジェクトも進行しており、勢いのある活動展開をしています。

なかなかいいセンいってるじゃん

小美玉市まるごと文化ホール計画を策定するプロジェクトチームは、3館で活躍する住民リーダー12名。コーディネーターに筑波大学大学院教授の蓮見孝先生を迎え、2年の活動期間の中でワークショップを通じて将来像を共有したり、シンポジウムを開催してたくさんの人たちと「文化のまちづくり」について考えたり、「持続可能な仕掛けづくり」や「文化と商工観光の連携」、「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」について学びました。

これらの活動を通じてプロジェクトチームが自己分析した結果は、「小美玉3館、なかなかいいセンいってるじゃん！」。では、この“なかなかいいセン”をどうやって持続させられるか、そこが鍵だねという話になりました。

人をいかに育てるか

蓮見先生やゲスト講師の皆さんから学んだことや、プロジェクトチームでワークショップを通じて共感しあった想いの共通点は「人」でした。人がまちを元気にし、文化を育み、誇りを生む。この地に住む人たちの郷土愛が深まり、子どもたちがこのまちに住み続け、あるいは魅力を感じた人が移り住む。まちの未来を握る鍵となるのは、いつの時代も「人」なのだということに気づきました。

「結局は人の問題だよな」「ここはいい人材に恵まれてますね。それに比べてうちの市は...」。他の自治体から視察に来られる住民や職員の方々が口を揃えて言う言葉です。ここで言う「人」とは、次世代を担う若者やリーダー、館職員のことを指します。小美玉のいまの魅力は「人」が支えているのです。では、その「人」をいかに育成し、持続可能な文化のまちづくりを実現するか。まるごと文化ホール計画の大きな柱になりました。

小美玉市まるごと文化ホール計画の基本的な考え方

このプロジェクトを通じて学んできたことを生かし、計画の基本的な考え方を次のようにまとめました。

- 1 . アピオス・みの～れ・コスモスを中心核とし、3館の個性・独自性を磨いて伸ばしながら、それぞれ担う部分と連携して行なっていくところを明快にしていきます。
- 2 . 地域コミュニティセンターや空の駅、商業施設、田んぼの中など、小美玉全体を活動エリアとして捉え、3館から発信していきます。
- 3 . 祭りや食文化などもまるごと“文化”として捉え、コラボレートしていきます。